
魂送り

緋夕 夜菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂送り

【Nコード】

N5915Z

【作者名】

緋夕 夜菊

【あらすじ】

少女は舞う。

人の魂が迷わぬように。魂が魔の者の手に落ちて誰かを傷つけることが無いように。

プロローグ

宵闇の中で、白装束の人影がゆらゆらと動いている。薄暗い景色のせいかな、その姿ははっきりと見えた。

白い人影は時に素早く、時に緩やかに、不規則に動く。その動きに合わせて白装束の袖がひらひらとなびいている。

人影の周りには、ぼんやりと光る何かがまるで意思を持っているかのように流れるように宙を舞っている。その光景を一言で表現するなら、『幻想的』と言えるだろう。

不意に、それまでばらばらに宙に浮いていた光がすうつと人影を取り囲むようにして集まり、その集合は柱のような形へと変わった。否、正確には光が大地から空へ、縦に並んだせいで細長い柱のように見えるのだ。

白い人影は、それを見ると動きを止め、静かに手を下から上に撫でるように振った。光は人影の手の動きに呼応するように音もたてずに空に吸い込まれ、やがて闇に溶けていつて見えなくなってしまう。

人影は光が空へ昇っていくのを見て、無言で手を合わせる。暫くそうやって微動だにせず佇んでいた。

どれくらいそうしていたのだろうか。

人影は光が昇っていった空を黙って見上げると、何事も無かったかのように踵を返してその場から歩み去った。

人影が遠くへ行くにつれて足音が徐々に小さくなっていく。

やがて、人影が見えなくなると、そこには誰かがいて何かをしていたということが信じられないほど静かで、見える範囲には足跡以

外は何の痕跡も残されていなかった。

幼馴染

晴空の下、一人の少年が住宅街から街の外れの方に向かって歩いていった。

茶色い癖つ毛に同色の瞳。どことなく幼い雰囲気を漂わせる見た目を背負った飾り気のない槍が裏切っている。

彼の名は漣れんと言い、この街唯一の道場の末っ子である。故に、槍術の腕前もそこそこで、少し槍術の心得があるくらいでは勝てないだろう。

彼は街の外れに向かっていたが、別に街を出るわけではなく、街の外れにある社やしろを目指していた。社には魂送りの儀式を行う浄化人と呼ばれる人々がいるわけで、漣は遊びに行くわけでも、暇潰しに行くわけでもない。彼は幼馴染みに他の見事をしに行くのであって、他の目的があるわけではない。

漣が槍を背負っているせいか、すれ違う人々が時折不思議そうな視線を向けてくるが、彼は気にしていない。朝の街道は人通りが少ない為、人混みに紛れる事がない。それ故に街中で槍を背負ったまま歩く漣は目立っているようだった。

社街の外れに近づくのに比例して、人を見かけなくなり、漣が目的地に着く頃には、周りに人は見あたらなかった。

社の敷地内で漣が歩を進める度に足元に敷き詰められた白い砂利が擦れあつて音をたてる。

と、引き戸がガラガラと音をたてて開いて、中から誰かがひよつこりと顔を出した。

短く切られた黒い髪とキリツとした顔立ちから漣と同年代の少年にも見えるが、体格や身に纏っている服はどう見ても女性用のもので、恐らく少年ではなく少女だろうと推測できる。そして、発せられた

声もまた少女のそれだった。

「なんだ漣か」

「なんだって何だよ」

「別に。他の人が来たと思っただけ」

少女はつまらなさそうにそう言いつつも、漣を離れにある自室へ案内する。

「時間、大丈夫なのか？」

「こんな朝から依頼入ってる事なんて滅多にないし。君こそ朝から何の用？」

彼女は漣に問いかけながらも自室に上がるよう促し、自分はさつさと室内に入っていく。それを見た漣も後を追って少女の部屋へ上がる。

「何の用って、何かあること前提で話進めるのか……」

「違う？ 君、いつも何か頼みに来るから今回もそうじゃないのかと思ったんだが」

「いや、当たってるけどな。俺の行動そんなにパターン化してるか？」

「してる」

少女に即答されて、漣は「そこは否定しろよ……ちょっとは考えてくれないじゃないか」と落ち込んで見せるが、少女は別段気にしたふうもなくお茶を淹れてきて漣に差し出した。

「で、改めて聞くけど用件は何？」

「単刀直入に言わせてもらうと、魔物退治の依頼入ったから詞音しおんに

同行して貰えないかと思つて」

「ふーん、やっぱりそうくるか。僕としては別に構わないけど、毎回それだよね。何で一人で行かないの？」

「あれは倒すだけじゃ駄目なんだよ。浄化人が浄化してちゃんと送つてやらないと暫くしたらまた復活するんだよ」

漣が詞音に言い返すと、詞音は「そんなこと知ってる」とため息をつく。

「何で毎回僕なのかつて聞いてる」

「幼馴染みだから頼みやすい」

即答。

詞音は一瞬驚いたように軽く目を見開いたが、やがて呆れたように小さく首を横に振った。

「そうくるんだ。……仕方ないな。ちょっと出てくるって伝えてくるから君は外で待つてて」

「ありがとな！　じゃ、後で」

漣は満足そうに笑つてそう言つと、傍らに置いていた槍を手にとつて部屋を後にした。

詞音は、とりあえず出したお茶を手早く片付けて漣と同じく部屋を出て、外出する事を告げるために別棟に向かった。

幼馴染（後書き）

かなりどうでもいいことかもしれないけど…
詞音が着けてる服は巫女装束的なイメージです。

洞窟

漣^{れん}が部屋^{やし}からでて社の門^{もん}のあたりに来て5分もしないうちに刀を携^もえた詞音^{しおん}もやってきた。

腰に差された太刀は ぱっと見れば彼女とはやや不釣り合いな大きさが、それは見た目だけであり、彼女がその刀を自らの体の一部のように自由自在に扱うことを漣は知っている。

「いつも思っけど聞かなかった事聞いていいか？」

「何？」

「何故いつも外に出るときは刀持ってるんだ？ しかも太刀」

「護身用」

漣の問いかけに、詞音は単語だけという簡潔すぎる答えを返した。だがこれはいつもの事なので漣は特に気にしない。相槌を打ってそのまま目的地に向かって歩き出すと、詞音もそれに続いた。

：

社から歩くこと数十分。2人は半ば朽ちたような とういうより、もう何年も人が立ち入っていないような洞窟の前に立っていた。周りには何もなく、生き物の気配すら感じられない。

心配になったのか、それまで何も言わなかった詞音がおもむろに

口を開いた。

「依頼とか何とか言ってたけど、場所当たってる？ 僕場所知らないけど」

「あってる。あれ？ 洞窟に行くって言わなかったっけ」

「聞いてないし言われた覚えもない」

詞音がすつとぼけたような答えを返す漣を軽く睨みながら棘のある言葉を容赦なく投げつける。これもまたこの2人の間ではよくある光景である。

「で、具体的な内容も聞かされてないんだけど」

詞音がやや不機嫌そうに言った。漣はというと、それを聞いて詞音に同行を依頼しておきながら何も伝えてなかった事を思い出したのか、そういうばそうだった、という顔をした。

「ああ、そうだったな。『最近魔物が辺りに出没してるから被害者が出る前に退治してほしい。ちなみにこの洞窟を住処すみかにしてるらしい』って話だったと思う」

「大雑把過ぎるな……そもそも魔物に住み処とかあるのか？ あと、どんな奴か分かってるのか？」

「……さあ？」

質問されたところで分かる事ではなかったので、漣はひよいと肩をすくめた。詞音はそんな彼を呆れたようにちらりと見たが、ずつと黙っていて動く気配がないのを確認すると、何も言わずにため息をついてすたすたと洞窟の中へ歩き出した。

一方、詞音の質問に答えようとしてあれこれ考えていたせいで、少し遅れて置いてけぼりにされそうになっていることに気付いた漣

は一瞬ぽかんとしていたが、すぐにあとを追った。詞音のゆっくりとした足音と、あわてて追かけてきた漣の足音が洞窟の中に反響しながら闇に吸い込まれていく。

「置いてくなよ！」

「個人的にさっさと終わらせただけ。君がばーっとしてるから悪い」

ようやく追いついて一言言っただけのもの、詞音にそう言われてなんと言い返そうかと思案する。しかし何を言っても言い訳にしか聞こえないような気がして何も言えなかったため、結果的に肯定していることを示してしまった。

「ちゃんと前見ないとぶつかるよ。暗いから特に」

「見てる見て……うわっ!？」

恐らく「ちゃんと見てる」という事が言いたかったのだろうが、その言葉は最後まで紡がれる事はなく、目前に迫っていた壁にぶつかりそうになって驚いた漣本人の声で途切れることになってしまった。

詞音はそれを見て呆れたようにため息をついていたが、すぐに表情を厳しいものにして暗闇の中凝視する。それはまるで、いるはずのない、見えるはずのない何かが居るのを見ているかのようなだった。何事かと口を開こうとした漣に気づくと、詞音は人差し指を唇に当てて、静かにしろと声を出さずに伝えてきた。

「漣、魔物がここを住処にしてるって話は本当みたいだ」

「はあ？ 何をいきなり……」

「死にたくなければ、槍、構えといったほうがいいよ。……この奥に結構いるみたいだから」

詞音はそう言いながら、自らも腰に差した刀を静かに抜いた。

洞窟（後書き）

どうでもいい話。

詞音が刀持つてるのは私が刀を持たせたかったから。
何か最近和風な物が好きみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5915z/>

魂送り

2011年12月28日23時45分発行